

第三十一回福崎町老人大学神崎・福寿学園の学園祭に寄せて

# 平和への願い

福寿学園陶芸部 真田 晃



私の忘れえぬ記憶は戦争体験であり、考えれば戦後六十八年の現在まで長期に渡る戦争のない、まず平和な年月だったと振り返る。この平和を体験して思ったのは、国民が戦後一致団結してそれぞれの立場で辛苦欠乏に耐えて頑張ってきた成果だと思ふ。同時に戦争がなかったのは日本国憲法がある結果だと思ふ。

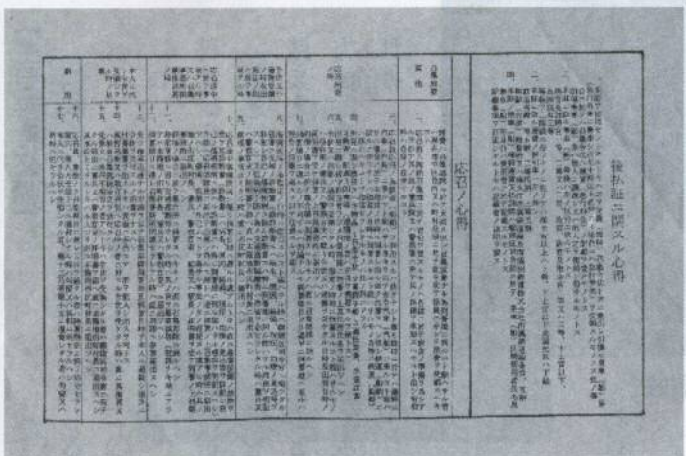
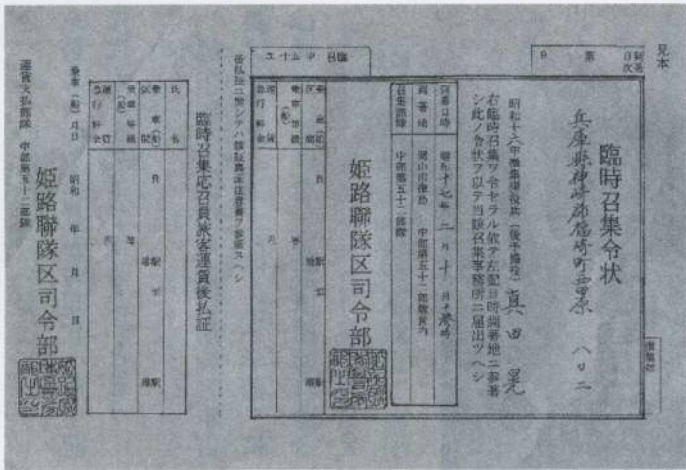
信にこの平和が永遠に続くことを願いたい。近年の世界各国の状況を紙上・ニュース等の報道で見聞する度に、核と化学兵器の生産保有について、その抑止、廃絶、自粛等の呼びかけ、会談、交渉をそれぞれの

保有国に対して行い、時には北朝鮮に対して抑止、制裁措置としていろいろな物資の絶交等の制裁を行うも効果がなく、むしろなお強力なミサイルの生産を行っている様子で、その戦争外交に憤りを覚える。最近ではシリアの内戦による犠牲者と避難民の続出等、この所でも核兵器の使用について、アメリカ大統領がその制裁を武力で行うと関係国に呼びかけたが賛同が得られず、自国アメリカでの反対もあり、已む無く断念したとの報道があった。のちにイランのウラン濃縮、パキスタンの武力強化などの世界動勢があり、日本でも安倍総理が憲法解釈で日本にも集団的自衛権はあるのだと発言した。世界は勿論国内でもこの発言に対し、各界層の学識経験者の解釈論や批評批判論などが続出した。中には憲法九条の改正論、極端な例では憲法九条を削除すべきという法哲学者の意見もあった。戦争体験者の私には、



昭和18年10月20日 上海にて

召集令状(複製)



今世界の主要国は戦争に対峙しているかの様な情勢にあると感じてならない。先頃の福崎町広報誌に町長の嶋田さんの投稿記事があり、拝読すると町長も平和を脅かす事態を疑念しておられる様子を感じた。前記の核については、我が国日本は世界の国が体験していない核爆弾の被爆国で、核の悲惨さを体験した世界で唯一の国である。それを想えば六十八年後の現在も、なお平和とはいえない。なぜなら、その後遺症がまだ多くの被爆者や遺族に残り、今なお苦痛と辛苦に耐えておられる現状があるからだ。また、戦争中の軍事政策を思い出すと、当時の軍閥政治下では長期に渡って国民が膨大な悲劇と犠牲に耐えてきた経緯から、私はあの非人道的残虐行為は絶対に根絶すべきだと思う。平和の根源は憲法九条であり、平和国家を守るのは九条を堅持することだと念じる。

ここでタイムスリップして、戦前の徴兵制度の在り方を、平成生まれの若者たちに迷惑ながら少し話してみたい。徴兵制度では男子が二十歳になれば義務的な召集によって、身体検査を受けるべしとの令状が届き、検査で身体に異常がなければ規定による甲種合格となり、青春真只中の

成年が未来の希望も目標も中断して指示された各種兵科の連隊に入隊となる。戦争に備えて教育訓練を受けるために、通常は二年間の軍隊生活に入る事となる。軍隊には階級制度があり、訓練指導に当たる上官班長、先輩古参兵と何段階もの指導者による訓練がある。それぞれの命令指導事項を忠実にこなすのは至難であり、欠札があれば訓練を終えて夕食後消灯までの間にその罰を受けることになる。その罰は耐えがたいものであっても反撃することすらでき



戦場にて 小休止

ず、我慢して耐えるしかない。そんな日々を耐えかねて連隊から脱走する者もいた。軍隊生活を二年間無事に終ると、一般兵卒は階級の一等兵として一般社会へ放免となり、予備兵役として有事の招集で徴兵されることになっていった。戦時中の徴兵検査では、入隊訓練の後、現役兵として戦場へ進駐していった。

そんな世代を思えば、今世代の若者は成人式で祝賀を受けてそれぞれ

自分の希望と目標に向って自由に羽ばたける平和がある。それは前記のとおり、祖父母両親先輩の復興の努力の賜物である。六十八年間の平和に感謝して今後もこの平和を次世代へと続けて欲しいと願う。最近の国際情勢を思うとき、平和の二文字が遠くに消えてしまうのではないかと危惧する今日この頃です。

戦争がなくても世界各国では天変地異による自然災害で幾多の国民が被災に苦しんでいる現状がある。そのような状況において、核や化学兵器の生産に入る気配を漂わせている。日本政府では憲法改正に必要な憲法九十六条をめぐる議論の中で、投票権を十八歳以上に改正したいという声もあつたが、審議の結果、二十歳以上になったようだ。また、十二月の国会において衆参両院で可決された特定秘密保護法案の成立で今後の国内政策の動向と国際情勢が戦争への歩みにならないことを願いながら、「今後の憲法改正を注視するのは今でしょ!」また、国連による北朝鮮への制裁措置の倍返しを希望して、筆を置きます。

以上、表記の平和の意味が自己反省と疑問しつつ、皆様のご批判をいただいでご理解を乞う。